

令和6年度 信濃教育会全県研究大会～赤穂南小学校～要項

信濃教育会全県大会テーマ	「子ども自らが、心ゆくまで探究する」
学校研究テーマ	「〈対話〉をしながら学ぶ子ども・教師」～子どもの生活に根ざした学びの創造～
題材名	「たのしみたいな、今日の自然体験園」
授業学級	2年2組
授業者	宮脇 結佳
共同研究者	宮島 新（長野市立城山小学校 教諭）

○期日 令和6年11月8日（金） ○会場 駒ヶ根市立赤穂南小学校

○日程

- 1 受付（職員玄関） 12:30～12:50
- 2 開会行事（視聴覚室） 13:00～13:10
 - (1) 開会の言葉
 - (2) 信濃教育会主催者挨拶
 - (3) 諸連絡
 - (4) 閉会の言葉
- 3 研究説明（視聴覚室） 13:10～13:20
 - (1) 研究説明
 - (2) 質疑・応答
- 4 授業公開 13:30～14:15
 - (1) 題材名 『体験園ですごそう』
 - (2) 授業学級 2年2組 26名
 - (3) 授業者 宮脇 結佳（2年2組担任）
 - (4) 授業会場 自然体験園
- 5 授業研究会（視聴覚室） 14:30～15:20
 - ② 授業者の振り返り・質問
 - ②グループ討議 ※ウェビングマップ活用
- 6 講演会（視聴覚室） 15:30～16:20（含：本時への指導）
演題「対話をしながら学ぶ子ども・教師」
講師 宮島 新 先生
- 7 閉会行事（視聴覚室） 16:20～16:30
 - (1) 開式の言葉
 - (2) 授業差挨拶
 - (3) 会場校校長挨拶
 - (4) 諸連絡
 - (4) 閉式の言葉

※持ち物 上履き 水筒等 汚れても良い靴（体験園内を歩きます） 雨具（小雨実施）

I 実践に寄せる思い

「今日は雨だからトノサマカエルがいるかも」。そうつぶやいたS児は虫取り網を片手に自然体験園へと駆けていった。予言通りトノサマカエルは探し歩くS児の前に現れた。捕まえたカエルを採集籠に入れたS児は、その後この籠を傍らに置いて、昆虫採集や基地づくり遊びを続けた。遊び（活動）を終え教室に戻るとS児は、トノサマカエルの絵を振り返りカードに描き始める。S児の机の上には（目の前には）、捕まえたトノサマカエルが置かれていた。



S児をはじめ2年2組の子どもたちは、興味関心のある事に躊躇無く取り組んでいる。子どもたちの活力に担任（宮脇教諭）は驚かされたり感銘を受けたり、時に悩んだりしてきた。その時々を思いを担任は、宮島先生（共同研究者）と出合った日から綴り続けている。

私たちは、〈対話〉と〈省察〉を手がかりに「子どもの生活と乖離しない授業」を願い、試行錯誤しながら実践を重ねてきた。それは、子どもの姿を元に自己を問い、子どもの内を想像し、明日の授業を思い描く営みであったようにも思う。「対話によって子どもも教師も新たな一步を踏み出すことができる」、「省察は自己との対話そのものであり、子どもの生活と授業を繋ぐ架け橋にもなり得る」。やりたいことをやりたいようにやりたいだけやって遊ぶ子どもたちと、「学習材」を携えて子どもと共にこの場にある（居る）教師。この間に生まれる一つ一つの出来事が、子どもにとって、教師にとって、かけがえのない〈学び〉を育む大切な場となるのではないか。2年2組の子どもたちと宮脇教諭の間に起こる出来事、私はこの物語を共感できる（感じるができる）〈私〉でありたいと思う。本実践は、自身の〈身体〉の有り様を問う場と言っても良いかもしれない。

【赤穂南小校長 池上 浩人】

II 私と陽菜と子どもたちのあゆみ

はじめに

4月8日、子どもたちは昨年度から通っていた学校敷地内にある自然体験園に、2年生になってから初めて行った。私は「これから自然体験園に行こうと思うんだけど」と話し始めると、子どもたちは「行こう」「行こう」と席を立ち、動き出した。私の話がまだ終わらぬうちに動き出した子どもたちを目の前に、「待って。最後まで話を聞いてからね」と子どもたちを制する自分がいた。動き出す子どもと、子どもを制する自分との間に感じるズレ。そしてそのズレは、体験園に向かう道中や、体験園で過ごしている時間にも何度も感じた。移動するときに、並ばずにバラバラになっているけど、これでいいのかな。全員がちゃんとここにいるのだろうか。目が行き届かず、不安だな。などと、私の心の中は、子どもを管理しなければならないという気持ちや、それができていないのではないか、という不安でいっぱいであった。

子どもたちは、体験園でやりたいことを、やりたい人と、時には一人で、思い思いに目いっぱい楽しんでいた。なぜ、あのとき教室で、席から子どもたちが立ち上がったのか、その答えが目の前にあった。いきいきと活動する子どもの姿を見て、子どもたちの思い、やりたいと感じる瞬間を、もっと分かることのできる自分になりたいと思った。また、子どもの”遊び”を大切に、子どもの生活や思考から乖離しない授業とは、どうあったら良いのか、子どもを制することなく、子どもの思考を感じられる教師とはどうあれば良いのか、自己課題であると感じた、4月のスタートであった。

教室にいたい。暑い

8月23日、2学期が始まった。1学期に子どもたちと日々すごしてきた体験園は、池に蚊が大量発生していた。予想をはるかに超える蚊の多さで、子どもたちは、蚊に何箇所も刺され「教室に戻りたい」と言った。また、暑さも重なり、私は帰りたいという子どもを止めようという気持ちにはならず、帰りたいと言う子に「うん。教室で待っていて」と返すことしかできなかった。すでに陽菜は体験園から一足早く帰ってきて「教室にいたい。暑い」と私に言ったので、陽菜と話をし、陽菜は教室ですごすこととなった。みんなで一緒に行動できたらよいのかもしれないが、陽菜が悪いわけではない。陽菜の意志で「こうしたい」ということをできる限り聞きたいと思った。

夏休み中に、体験園でキアゲハの終齢幼虫を4匹捕まえて私の家で飼っていた。2匹は夏休みに羽化し、残りの2匹のうち1匹が、この日の朝、羽化しそうな様子だった。私は、家に置いていくか、学校に持って行くか迷った。休み明けの初日の教室に生き物を持って行くことで、子どもたちの落ち着きが無くなってしまふのが不安だったが、羽化の瞬間を私は見たことが無かったので、自分も見たいし、みんなで見るのができたら良いなという気持ちも大きく、持って行くことにした。朝8時ころ、キアゲハのいる水槽を見た司織が「あ、出てくる！」と叫んだ。そこから羽化が始まり、時間をかけて成虫のキアゲハが出てきた。羽はまだ柔らかく、破れてしまいそうだった。しばらくの間は落ち着きがなく動き回っていたが、しばらくして、木にぶら下がると動きが落ち着いた。羽を伸ばせる場所を探して動いていたということに、私は後から気づいた。無事に羽が乾くと、陽菜は教室の前にある自分たちが育てている大豆の畑に逃がした。自然の中で生きる生きものの不思議さ、おもしろさを、今日も感じる、感動的な瞬間を見ることができた。

8月26日、体験園に行く時間になると、陽菜は「行きたくない」と言い、体調の関係で行かない大暉と一緒に教室に残った。今まで体験園に行っていた子の中にも、「今回は行かない」という子がいた。一方で、今までと同じようにすごしている子もいた。夏休み明けの体験園は、蚊がたくさんいて、雑草も長く伸びてきていた。それに加え残暑も厳しく、太陽の光を直に感じた。体験園という場で子どもが「すごしたい」と思える手立てがない私の不十分さを痛感した。一方で、自然体験園なので、自然な姿の体験園であることも間違いなく、この時期だからこそ、ある種のすごしにくさというのも、自然そのものだと思った。「今は体験園に行きたくないんだ」と子どもが思うことは、そのときの子どもの素直な気持ちである。でも、その気持ちを超越する“魅力的なもの”を教師が提示することができたら、子どもたちの姿は変わっていくのかもしれない。

8月28日、この日は2組に入っていただけの職員が担任以外に2名いたため、体験園、池のある中庭、教室の3箇所に分かれて活動をした。陽菜は池に向かい池の中にいる小魚を捕まえていた。子どもたちと約束をしながら、活動を決めているが反省もある。この子たちから、たくさんのことを学んでいる。子どもが納得しているかどうか、ということ。やりたいこと、やること、をどう組み合わせしていくか。どのタイミングで子どもに提案するか。約束を守ったときの声がけはどうするか。約束できないことがあったとき、私が



「それはできない」では、納得しないだろう。どうすれば子どもの願いを叶えながら、一緒に活動ができるか、子どもたちとの日々のなかで答えを見つけ出していきたいと思った。

8月29日、どうしたら、今の状態で、子どもたちが体験園に行きたいと思うのだろうか悩み、考えた末に、体験園の奥で見つけた、この場所を見せた。私の予想通り「朝顔を取りに行きたい」と声が上がった。ただ「体験園で、これを楽しみたい」「体験園で、こんなことにわくわくして取り組みたい」という本来の私の願いは「体験園に行かせる」こと自体が目的になってしまっているようで、本来の目的を見失ってしまっているのかもしれないと思った。体験園に行けば良いわけではない。そして「行く」「行かない」を繰り返す陽菜の反応に左右される自分がいた。そこで、しばらくは無理をしてまで体験園に行かなくてもいい、子どもたちの反応を見ながら、自分自身がもう一度体験園の魅力を考えようと思った。

カマキリ捕まえたのー！

9月5日、久しぶりに体験園へ行った。陽菜も一緒に体験園に行くと「カマキリをつかまえない」と言い、草原の中に入っていった。自然体験園のウェビングマップを作成し「願う子どもの姿（陽菜に焦点を当てて）」を考えた。「体験園の感じ方が今までと変わってほしい…やりたいことができるんだと思える場所になってほしい」と私は考えた。体験園に行くまでは、陽菜はとてもいい表情だった。しかし、カマキリを見つけようとする前に、虫がたくさんいることで、陽菜の表情は次第に曇っていった。そして「虫がたくさんいる。陽菜、虫大っ嫌い。刺される。もうやだ」と怒り、教室へ帰って行った。

9月6日、体験園には行かなかった陽菜は、みんなが体験園から帰って来る時間になって、「カマキリ捕まえたのー！」と大きな声で叫びながら、私たちの方向に向かってきた。そして教室の前にある中庭で捕まえたのだと言った。満面の笑みで捕まえたことを語る陽菜を見た私は、陽菜を体験園という枠の中に入れようとしていた自分に気が付いた。枠を広げて考えると、願いをもった陽菜は、体験園とは違う場所で、活動して、願いを実現させた。体験園がおおもとになるが、そこにこだわりすぎずに単元の構想をしていくこともできるのではないだろうかと思った。

9月12日、この日は祖父母参観日だった。朝、登校した陽菜は「頭が痛い」と頭痛を訴え、保健室ですごした。陽菜の頭痛の姿を見て、私は「恐らく家でなにかあったのだろう」と思っていたが、やはりお父さんと喧嘩してしまったことがわかった。何があったかは聞かなかったが「でも陽菜、謝った」と小さな声で言った。保健室では養護教諭に「陽菜と一緒に寝たいのはパパだけ」という会話があったようだった。大好きなお父さんとそんなことがあったから、朝は落ち込んでいたのだろうなと改めて思った。保健室から戻ってきた陽菜は、夏椰と一緒にすごした。陽菜はたまに「陽菜、遊ぶ人がいないから」と言うのだが今日の2人を見ていて、2人ともすごく楽しそうで、見ていた私も幸せな気持ちになった場面であった。

私はやっぱり、陽菜と体験園に行きたい

9月13日、体験園で、のこぎりや金槌を使い、木を切ったり木と木を組み合わせたたりする活動をした。私は、この活動をするのを迷った。なぜ迷ったかという、この活動をした先の完成形が、私のなかにも、ないからである。このまま続けたら、何も完成しないまま、ただそのとき釘をうつことを楽しむ、木を切ることを楽しむ、それで終わってしまうのではないか。でも、子どもたちは「基地を作りたい」「だから今日はのこぎりを使いたいんだ」「金槌を使いたいんだ」「先生用意してくれただろうか？」と言っているの、この子どもたちの「やりたい」思いを止めることはできなかった。ここで、私は半歩先を歩けていない

自分がいることを痛感する。でも今回は、それでも、のこぎり、金槌を扱う経験を子どもにさせたいなと考えた。そして実際にやってみて、良かったなと感じた。材料を体験園の中で探し、それを組み合わせていく子どもたち。そこには、たくさんの「楽しい！」があった。また、これからの基地の一部になりそうなものができていた。これをこうして、というように自分の願いに向かって活動している子もいる一方で、ただのこぎりや金槌を使いたくて道具を使う子もいたが、それでもいいと思った。体験園の中に、動かないしっかりとした基地を作れたら、陽菜も来れるかな、みんながもっとわくわくするかな、と最初考えていたが、移動するタイプの基地も良いのでは、と感じた。武器を作る子も出てくると思う。風落は「椅子を作りたい」と言った。体験園で、自分で木の椅子を作って座れたら、良いなあ。テーブルができたら、レストラン遊びをしている子どもたちが、より本格的なレストランになるなと思った。

9月15日、宮島先生が南小の体験園に来てくださった。「子どもも、誰もいない体験園を、独り占めしたくて7時ころから来ている」と宮島先生はお話しされた。8時すぎに、私はノコギリ、麻紐、ナタを用意して体験園に行った。宮島先生と一緒に、体験園の左奥にあるできるだけ真っ直ぐな竹を3本、ノコギリで切った。そして3本の竹を、長さをそろえて切り、枝払いをしたら、竹の上のほうを、3本まとめて麻紐で結んだ。それを立てると、ティピーテントになり、人が入ることのできる場所となった。布をまいたり、洗濯ばさみを使って周りに何か巻いて止めたりすれば、自分の場所ができる。竹材店で、長さを切りそろえた竹がそんなに高くなく手に入ることも教えていただいた。宮島先生からは“タイミングが大事。子どもの意識のあるときに、よりよいタイミングで学習材と出会わせること”も教えていただいた。作った3本の竹のティピーテントは、体験園の右奥に隠した。子どもたちがこの竹と出会った



ら、1人1人が「おうち欲しい」と言うだろう。しかし、全体に提示して、みんなが欲しい！と口々に言う中、陽菜は「陽菜、やだ。だって虫いるもん」と言いそうな気がする。体験園にある、写真を見せたら、陽菜はやだと言いきそうだが、体験園と結びつけずに、そのおうちを教室や多目で陽菜と出会わせたらどうだろう？また、1人1人作りたいと意識が向く前に「クラスみんな、誰でもここに入っていいんだよ」という提示の仕方で、今日作った竹と出会ったら、みんなの流れにのって陽菜も体験園に来れるかもしれない。陽菜に焦点をあてて考えたときに、陽菜は「体験園がやだ。虫がいるから、暑いからやだ」と考えているという捉え方を私はしてしまっていたが、宮島先生はそうではなく「今は教室が安心できる場所なんだろうね」とおっしゃった。だから、陽菜の居場所、安心して過ごすことのできる居場所を体験園につくることを考えることが大事なのだ、と教えていただいた。陽菜が、安心してすごせる場所。陽菜が「ここにいたいな」って思える場所。それを考えることが大切だと思った。そして私はやっぱり、陽菜とも体験園に行きたい。あの場所ですぐ陽菜を私は見たい。陽菜と一緒にすごしたい。今まで一緒にすごしたときは、多くは、私や他の先生と手をつないで、大人の近くですごしていた。そうではなく友だちと活動するときもあったが、長続きはしなかった。虫がいやだ、一緒に過ごす友達がいない、暑い、など何らかの理由があり、体験園に行ったらしくすると、「もう帰る」となってしまうことがほとんどであった。こちらの働きかけによって、体験園という場所で、陽菜と一緒にいたいお友だちと「ここにいたいな」と思う場所ですぐ姿を見たい。

きれいなものを「きれい」と素直に言う陽菜。体験園が安心してすごせる場所となれば、陽菜自身が、もっと解放されていくと感じている。

やっぱりあとにするね

9月17日、朝、出勤した私は1人で体験園に行き、洗濯バサミが、竹にはさめるか試した。先週、子どもたちが作った基地が、そのまま残っていた。陽菜は機嫌が悪そうな朝で、持ってきた給食のエプロンをバン！！と床に打ち付けていた。体験園でのティピーテントのことを相談しようと思って声をかけたが、陽菜の姿を見て、私は「やっぱりあとにするね」と言った。

陽菜は、体験園に最初の数分間だけ行って、教室に戻っていった。私は「30分後にまた来てくれるかな」と声をかけたが、陽菜は来なかった。その時間、陽菜は支援学級のなのはな教室に行って、大暉、1組の涼香とすごしていた。その教室にいた看護師から「陽菜がいてくれてとても良かった。陽菜もいい顔ですごしていた」と後から聞いた。体験園と一緒に行くことはできなかったけど、そういう時間になっていたと聞き、それは良かったと思った。でも、私は、どうしたら陽菜が体験園に行きたいと思うか、体験園で安心できるか、を考えなければならない。体験園で、いい顔で過ごす陽菜を見たい。竹でのテントのおうちは、陽菜にはまだ提示していない。朝「こんなのどうかな」と言おうか迷ったが、陽菜の今朝の様子から、この話にのる姿がピンとこなくて、この日は話すのをやめた。

今度は陽菜を体験園に連れて行こ！！

9月19日、今日は何だか疲れた。道徳の時間、陽菜は図書館の本をどうしても読むのをやめられず、教室の中にはいるけど、道徳のことは何も考えていなかったと思う。私は、子どもたちをわがままにさせてしまうのか？なんだか、自分に対しても、すごくもやもやが広がる。切り替えをする。授業に取り組む。メリハリをつけたいと思う。こちらの授業がもっと良くなればもっと多くの子がいきいきとするのだと思う。

9月24日、今朝の体験園では、何よりも先に、大きく広がる緑色が目に入った。特に、体験園の真ん中にある木の緑色は、他とは違って、黄緑色に輝いていた。何だかパワーを貰えるような感じがした。そして、大きな蜘蛛の巣。上からボトン！と落ちてくるクヌギのどんぐり。山椒の木。数日前の体験園とは違う様子になっていく、日々変化している体験園を感じた朝であった。1時間目の体育は、グラウンドで運動会の表現の練習。陽菜は「(グラウンドに)行きたくない」と言った。支援の先生に対応していただき、あとから一緒に来た。けがのため見学している奏介と練習が終わるまで2人でふらふらとしていた。陽菜は機嫌が悪い様子で「陽菜、運動会出ないから」と吐き捨てるように言った。理由も聞けないような雰囲気だった。明日はどうだろう。恐らく運動会には出たいと思っているだろう。2時間目の体験園は、奏介は行きたかったのに、陽菜と1時間目から一緒にいたため、陽菜が奏介を離さず、それを奏介は断ることができず行くことができなかった。「もしかしたら、そうなるかもしれない」と私は思っていたが予想通りとなり、奏介には申し訳なかった。奏介と私は「今度は陽菜を体験園に連れて行こ！！」と意気投合した。

久しぶりだねえ

9月25日、ほぼ初めて、5時間目に体験園に行った。夏のような太陽の暑さではなく、秋らしい涼しい気候だと感じた。この日の数日前、私は、陽菜に「帰りたいときには帰りたいと言っていいから、最初はいつも一緒に体験園に行こう」と自分の気持ちを伝えた。すると意外にも陽菜は「分かった」と素直に反応し

た。そしてこの日は、陽菜は「行きたくない」と言うことなくみんなと一緒に体験園に行った。体験園に向かう道中で、陽菜は「久しぶりだねえ」と自分で呟きながら「みんな何してるの？」と私に尋ねた。陽菜と2人で話している最中、私は、“今だ”と思った。そして、ずっとタイミングを待っていたティピーテントの話を陽菜にした。「陽菜用のテントがあるんだよ」と言うと、陽菜は「ええー」と、にこっと笑いながら私を見た。「どこに立てたい？」と聞くと、体験園の中で一番広い場所のど真ん中を選んだ。「暑い」と言う陽菜なので、日陰を選ぶのではないかと思っていた私は、ちょっとびっくりした。テントを立てる場所が決まると、そこから陽菜は活動を



をどんどんと始めていった。まずは「竹を切りたい」と言い、のこぎりで切り始めた。陽菜が切っている竹の端を、楓乃が押さえた。美樹もやってきて、一緒に活動する。陽菜の感情は天気みたいにコロコロ変わるため、私は心の中で、いつ陽菜の気持ちが変わるのか不安に思っていたが、そのようなことはなく、今日のこの時間はとても尊かった。

9月27日、陽菜は、朝から表情が良くて、休み時間も一緒に鬼ごっこをした。機嫌が良かったり、悪かったりというのは、自分を取り繕わず、本当にありのままの姿だと捉えて良いのだろうか。この日は3・4時間目が体験園の時間。私は体験園で過ごす陽菜の機嫌を損ねないようにと先回りをして動いてしまうことがあった。前日に、初めて陽菜のテントを作ることができたこともあり、私はほとんど陽菜と一緒に活動していた。そのこともあり、今日の体験園では、陽菜ばかりを見てはいけないな、と事前に思っていたため、陽菜が途中で「竹が欲しい」と私に言いに来たのだが、私は、すぐに対応するということはしなかった。心の中では、「ああ、この私の反応で、陽菜がもう帰ると言ったらどうしよう」とドキドキしながら「今はごめんね」と陽菜に返した。陽菜は、その後もテントの中で寝転んだり、友だちとおしゃべりをしたりして、くつろいですごした。そんな陽菜の姿を見て、私は陽菜が友だちとすごしていることが、うれしく思った。そして、私が手を貸すよりも、友だちと一緒にすごすことのほうが、何より陽菜にとっては充実した時間となったのだろう。

2人くらいなら大丈夫そう

10月2日、1時間目が終わり、音楽へ移動するとき。孝太が「いきたくない」と言い、陽菜も「怒りがおさまったら行く」と言った。孝太の話を知ると、孝太は、すっかりしたのか案外すんなりと音楽室へ向かった。陽菜の怒りの原因は、私の言った言葉らしく、でも、私は、さっきまで普通に会話していたのに、「そんなことを今更言われても、急に何なの!？」という気持ちになってしまった。久しぶりに登校した奏介の机に、お化けの札が置いてあった。それを「陽菜ちゃん？」と私は聞いたのだ。それが嫌だったらしい。でも、今の私は、このタイミングでそう言われてもどうしてもモヤモヤするし、何なら今、陽菜と会話をしたくない。素直になれない自分がある。教室にいた陽菜は、タイミングよく支援の先生が音楽室に連れて行ってくれた。そして音楽の時間が終わり、音楽室から帰ってきた陽菜は、さっきとは違い、表情がいい。その陽菜を見たら、私は自然と「嫌な思いをさせるつもりはなかったけど、ごめん」と言えた。陽菜も「うん」と頷いた。恐らく陽菜がまだ怒っていたら、私は素直になれなかっただろうが、陽菜の顔を見たら、謝ることができた。

10月4日。陽菜は、朝から孝太と色々あり、陽菜の行動が良くないと判断した私は、そのことについて少し厳しく陽菜に話した。それもあり、最初、陽菜は体験園には行かなかった。そうなると思っていたが、このときの私の対応は後悔していない。しかし、もう少しで帰るというタイミングで、陽菜が体験園にきた。少し複雑な顔をして。私は、「どうして!？」と思った。そして「孝太くんに話したいって言ったけど、断られた」と言った。「タイミングを見て、孝太にまた話そう」と私は陽菜に言った。陽菜を、そういう気持ちにさせたのは何だったのだろうか。自分の中で、陽菜は色々と考えたのだろうか。このようなことは初めてで、本当にびっくりした。

10月10日、3、4時間目に体験園に行った。今日は1組とも一緒だった。今日は、一人も「帰りた」と言って先に帰る子がいなかった。体験園に行くと、美樹は「陽菜ちゃんのテントやろう」といつものようにすぐに言った。そしてシートを敷いて準備を始めたが、陽菜はいつものテントに人が集まってくるのが嫌だと感じている様子だった。そして最初は「今日はテント作らない。虫をとる」と言った。しかし、その後「今日は1人でテントに入りたい」と言った。そのため、いつものように陽菜のテントのシートの上に寝転がる子たちに「今日は陽菜ちゃん、1人でやるね」ということを伝え、私は陽菜のテントを作り始めた。そこに1組の希美が来た。希美にも「ごめんね」と言うと、陽菜は「2人くらいなら大丈夫そう」と言った。そしてテントを作り、陽菜と希美がテントの下ですごした。今までの陽菜であれば、誰もテントに入れることなく、1人ですごしていただろう。しかし、天気みたいな陽菜の感情が、少しずつ、少しずつ、雨や嵐でなく、穏やかな晴れの日が増えてきていると私は感じている。陽菜のテントを自分から手伝う美樹や、陽菜と笑顔ですごす夏椰や奏介の顔が思い浮かぶ。陽菜はすごく優しいし、友達から頼られる部分がたくさんある。その陽菜が、どのように学級のなかで位置づいていき、友達とつながっていくことができるか。私には、まだできること、やらねばならぬことがあると感じる日々である。

おわりに

6月3日、私は初めて宮島先生に授業を参観していただいた。そのときのご指導を受けて改めて気がついたことは、私がしている教材研究、教材の価値を考えることは、机上でしか行えていないということである。「これから、この体験園で2組の子どもたちと、どんなことを楽しめそうか、どんなことができそうか」という宮島先生の質問に、子どもの姿を頼りにすることでしか答えられなかった。子どもがやっていた遊び、自分が直接見た子どもの活動の内容しか答えることができなかった。その原因がはっきりとした。自分がその場に行って、その場のわくわくを感じていないこと。その場と離れたところでしか授業を考えていないこと。これは、生活科だけではない。体育、国語、道徳…。どの教科においても、「教材化の視点」が甘い。どこが楽しいか、どこで子どもが考えたくなるのか。そして、この日から、私は省察を始めた。はじめは、書き方も分からなかった省察が、今は書きたいこと、書かなければならないと感じることであふれている。事実を書くのみでなく、その時に自分が感じたこと、子どもは何を感じていたのだろうか、どうして子どもは、あのように行動したのだろうか、と子どもの姿を振り返りながら、自己と対話する省察の時間が、私にとってはなくてはならないものになった。池上校長から、”教師の仕事は綴ること”だのご指導を受けた。今は、その意味がとてもよく分かる気がする。省察を書いている中で、「みんながテント欲しい!と盛り上がる中で、陽菜はいらないと言うだろうな」というイメージが浮かんだり、「この体験園に、竹がまだ必要だ」と感じ、材料を用意したりした。その時には気づけなかった事実が見えることもある。また、次に、この子に声をかけるとしたら、何と言うだろう、とか、明日の体験園では、この子とこんなことをしたい、という、自分の行動や気持ちも見えてくる。綴ることは、子どもの姿をもっと見よう、見ようとする

こととつながっていることを実感している。不安で始まった4月、この子たちと何を目指して歩いていけばよいか悩む日々であったが、今は、2年2組の子どもたちと過ごす体験園の時間、授業の時間が、とても楽しい。これからの日々、ありのままの子どもたちと、ありのままの私で、心から楽しいねと笑い合える時間をたくさん積み重ねて歩いていきたい。何よりも、子どもの思いや願いを感じられる自分でいたい。

Ⅲ 授業研究会の持ち方（予定）

前半 14:30～15:00 グループでの語り合い ※グループは当日お知らせします。

○ウェビングマップを囲んで、観ていた子どもの姿を位置づけながら、子どもの学びや教師の有り様等について語り合います。

後半 15:00～15:20 全体での語り合い

○グループでの語り合いを通して、感じたことや、見えてきたこと、分からなくなったこと等を語り合います。

Ⅳ その他（連絡）

- (1) 学習指導案は、当日配布いたします。
- (2) これまでの実践を通して学ぶことができたこと、考えさせられたこと等の具体については、当日の「研究説明」の場でお伝えいたします。
- (3) 子どもや授業者の様子、日程や研究会の持ち方等「聞いておきたいなあ」「こうした方が良いのでは」といった質問事項やご意見等ございましたら、本校（0265-81-5700）担当（安田）まで連絡ください。
- (4) 授業会場は、「自然体験園」（本校敷地内）を予定しております。天候にもよりますが、動きやすい靴での来校をお勧めします。小雨の場合も体験園での活動が予想されますので、雨具の持参もお願いします。
- (5) 駐車場につきましては、次ページを参照ください。

【赤穂南小学校駐車場のご案内】

線路西側からお入りいただき、体育館南側にお止めてください（下図参照）

